

雄雌の隙

中村恭子の「ハナバチ」に寄せて

郡司ベギオ幸夫

中村恭子の作品「ハナバチ」は、オフリスというランの絵である。オフリスは或るハチのメスに擬態し、オスバチを誘いこみ、受粉に利用するそうだ。中村は、ハチとランの間に普遍的な性を、生殖の線を、見出していく。別にハチとランの間に、動植物の壁を越えたハイブリッドな生命が生まれるわけではない。オフリスに見出されるのは、いわば単なる擬態だ。中村は、なにゆえその単純な現象に、過剰な意味を読み込み、ハチとランの在り様そのものを絵画化し、普遍的生殖、生命の本質を構想するのか。そう思われる読者は多いだろう。しかし、私の感覚は、中村のその感性に非常に強く共振する。

生殖や雌雄によって通常イメージされるのは、鍵と鍵穴のような補完関係であり、陰陽のシンボルのような二つで一つを成す或る全体だ。厳密な補完関係の間には一切の遊びも隙もなく、例えばオスバチとメスバチの交配行動の間に、ランのような無関係なものが関与する余地はなさそうに思える。ところがそうではない。むしろ雌雄は全く異なる位相にあり、互いに対応関係を見出そうにも質的に異なる。雌雄の接続問題は収集がつかなくなるほどの作業となる。それほど両者は乖離し、その間は裂けている。

平仮名とその意味は、その対応関係に曖昧さなく一義的に決まっているように思える。文字「ゆ」はくゝと発音される、というように。先日私の研究室を出ていまは或る大学に勤める者が、研究室を久しぶりに訪れた。彼には三歳の娘がいて、保育園は、娘に平仮名で名前を書かせるという。彼女は、自分では正しい平仮名文字を書いているつもりでいる。しかし、或る文字は左右逆の鏡文字、或る文字はぐるを巻き、或る文字は稲妻のように流れているらしい。彼が不思議がるのは、次の点だ。娘の書く文字は他人が見たらとても判読できない。しかし娘は、常に間違いない彼女なりの平仮名である同じ記号を並べ、かつそれで自分の名前を発音する。同時に、彼女なりの平仮名の名前と、活字で書かれた平仮名の名前を照合するというのである。似ても似つかない二つの記号列を。

彼の三歳の娘は、平仮名の文字を、視覚像において認識すると共に、記号の、音や形状に由来するだろう、肌触りを感じているに違いない。彼女の名前は、この視覚像としての記号と、その肌触りの対で、一個の名前という現象を成す。彼女の書く平仮名の名前を×、活字の名前をくとしよう。×とくは似ても似つかない。しかし×の肌触りのは、実は彼女においてくの肌触りでもある。視覚像とその質感・肌触りは、質的に異なるものだ。それはボタンをはめ、鍵と鍵穴を対応させるような単純な対応関係を意味しない。だから、視覚像と肌触りの関係は、一対一に規定できない。くとして彼女において、×、くが共に肌触りのはに関係付けられ、×とくが肌触りのはにおいて一致することが可能となる。

記号とその肌ざわり、それは子供が成長するにつれ、記号とその意味に、さらには、記号とその音、程度の厳密な関係にまで変容するだろう。記号とその音にまで形骸化すれば、両者の間の遊びや、隙はもはや見出せない。両者は二つで一つの或る全体となる。そう理解されることになり、かくして大人は、記号の意味の一義性を信じ込む。

文字とその肌触りの間にある遊び、隙は、まだ自然の中にある子供においてのみ感得されるのだろうか。同じような関係は、しかし成人においても稀に、カブクラ症候群や、デジャブ、ジャメブという形をとって知覚される。カブクラ症候群は、ある種の認識障害で、認識される事物とその質感・肌触りの矛盾を主張する症状を示す。例えばカブクラ症候群にある者にあつて自分の妻が、姿かたちは妻そのものであると認識され、同時にその親近感、空気が全く違うと感じられる。このようなとき、彼らは、妻が宇宙人にすり替えられた、と主張する。

初めての経験を、既知経験であると懐かしく感じるデジャブや、経験したと認識しているにもかかわらず、それを初めての経験と感ずるジャメブも、カブクラ症候群と似た感覚と言えるだろう。記号的認識としての形式的記憶と、その記憶に関する親近感との対で、記憶想起という出来事が立ち上がる。ここで、形式的記憶が存在し、親近感がないとき、それはジャメブを意味し、逆に

形式的記憶が存在せず、親近感があるとき、それは「デジャブを意味する」というわけだ。ここにあるのは、記憶と、記憶に関する肌触り（過去感覚）である。両者は一見、自明な対応関係を成すと考えられる。ところが、両者はあたかも独立であるかのように想定可能で、だから、デジャブやジャメブが可能となる。記憶と、記憶の肌触りの間には、デジャブが発生する隙がある。

もちろん、形式的記憶と、その肌触り（経験としての親近感）とは、互いに独立ではない。或る経験がこのように分節され、分節されることで互いに照合しコミュニケーションされ、その果てにデイスコミュニケーションであるデジャブやジャメブが可能となり、独立であるかのように振舞う。形式的記憶とその意味は、互いに隙をつくり、隙を窺いながら、その隙を埋めようとす運動それ自体だ。だからデジャブやジャメブは、二つの独立な概念装置「記憶とその肌触り」の接続問題に関するミスマッチではない。

話を生殖にもどそう。そう、雌雄の関係は、互いに補完し合う一個の全体ではなく、幼児における平仮名と平仮名の質感の関係であり、カブクラ症候群で発見される、事物とその肌触りの関係であり、デジャブやジャメブを通して見出される、記憶とその親近感の関係だということだ。両者は、質的に異なり、位相を異にする。雌雄は、単純な対応関係を想起させるような位置にいない。生殖のコミュニケーションは、だから元来デイスコミュニケーションを前提とし、誤解の連鎖の果てに辛うじて頑健な関係を形作るに過ぎない。

平仮名が担うその肌触り・質感は、本来自由に獲得されるが、成人となるにつれ、それが発音によってのみ意味されるようになる。私はそう言った。逆に、だからこそ、その関係は無根拠に使われるだけであり、いつ覆されてもい自由を担保する。雌雄の間関係もまさに同じだ。オスバチとメスバチの配偶者関係は、或る行動の連鎖によって厳密にプログラムされ、遺伝子に書き込まれ、その間には一切の曖昧さや、隙はなさそうに思える。しかし事態は全く逆だ。もし一切の隙のない決定論的行動のみが支配するなら、ハチは進化に対処できない。配偶者行動が、プログラム化された厳密な行動の連鎖によって決定されながらも、メスやオスは相手を選択する。プログラム化され、決定される行動様式は、常に或る側面に限定することしかできない。だからこそ、そこには本質的な変異を生み出す遊びがあり、進化に開かれた隙がある。生殖は、雌雄の間の原理的な隙をなくしてあり得ない。オスとメスもまた、常に他方の隙を窺い、既存の決まりきった関係以上の関係待ち構えているというわけだ。

ハチの雌雄間に隙があるからこそ、それは生命の営みなのである。ランにつけいられる隙こそ、生殖が原理的に有する隙なのだ。メスバチの体にオスバチを誘いこむような鮮やかな色彩が生じたとき。確かにその色彩はオスバチを呼び込む効果があった。しかしその色素は、メスバチの生息環境で或る芳香分子を吸着し、その匂いはさらにオスバチを狂わせた。メスバチの変異（色素の生成）は一つの側面（色彩）で一つの意味（ほどほどにオスを誘う）を持つが、もちろんそれに限定されない。この無限定さが、メスバチの形体、行動に隙を作り出し、予想外の効果を醸し出す。オスバチにしても同様の現象が起こるだろう。オスバチはメスの匂いに狂いメスバチ目指して飛んでいく。ところがこの匂いは、他の昆虫、たとえばカメムシも狂わせた。メスに向かうオスの行動は、しばしばカメムシに妨害され、カメムシの匂いが、オスバチにまごわり着くことになる。ところがさらに、このカメムシの匂いが、メスを狂わせる。このとき、より飛行速度が遅く、カメムシに追いつかれるオスほど、カメムシに匂いを付けられ、結果的にメスバチに好まれた。飛行速度に関するオスバチの変異が、ここでも予想外の効果を与えたことになる。

オスバチとメスバチの行動の連鎖は、隙をつくり、隙に乗り、隙に誘い込まれ、隙に遊ぶこととなる。ここで私はカメムシを登場させた。オスバチとメスバチのコミュニケーション＝デイスコミュニケーションに、カメムシが巻き込まれた。巻き込まれ、その隙に乗り込むものは、カメムシに、昆虫にすら留まらない。「コミュニケーションに伴う意味の無限定さ、隙は、ハチの周囲にあるあらゆるものに、物理的相互作用を通じ観察・観測され、あらゆるものが参与の機会を窺うことになる。ランは、こうしてハチのコミュニケーションに入り込み、絡めとられる。もちろん、ハナバチにおいて、その逆も成り立つ。ランにおける雄花と雌花のコミュニケーション＝デイスコミュニケーションに、ハチのほう絡めとられたというように。

生殖の線、それは、世代から世代へ受け継がれる垂直方向の線であると同時に、いやむしろ、水平方向の横断的な線である。隙を窺い、隙に付け込み、隙にあえて誘われ、隙に遊ぶ。全てのものが隙を観測し、隙に参与する。この壮大なページエントこそが生殖の線なのであり、むしろ事物とその意味の、物理化学的相互作用の実体なのである。中村の切り取ってみせたハナバチは、垂直・水平方向の交叉する、まさにそのような場所だったのだ。

《生殖の線ーハナバチー》
紙本彩色, 116.7×91 cm, 2007 年（部分）